

「ごっこ遊び」研究の傾向

—— 保育実践を対象とした調査に着目して ——

“Pretend play” research trends
— Focusing on a survey of childcare practices —

児童学科 Dept. of Child Studies	松原 乃理子* Noriko MATSUBARA	大滝 茜** Akane OTAKI	織壁 佐和子** Sawako ORIKABE	富田 貴代** Takayo TOMITA
	深沢 佐恵香*** Saeka FUKASAWA	森末 一代** Ichiyo MORISUE	請川 滋大 Shigehiro UKEGAWA	

*日本女子大学学術研究員 **家政学研究科児童学専攻 ***山梨学院短期大学保育科

抄 録 本研究では、ごっこ遊びに関する研究の中から、幼稚園や保育園における保育実践を調査対象としたものに着目し、それらの研究の傾向を概観した。そして、18本の分析対象論文をその研究目的、定義、年齢と人数、分類、保育者という5つの視点から考察した。その結果、ごっこ遊び研究はごっこ遊びを研究の主目的とするか否かに分かれていた。ごっこ遊びの定義は研究毎に異なったが、7つの要素が複合的に含まれている傾向があった。研究対象とする年齢はおおよそが2歳以降であり、事例に登場する人数はおおよそが2名以上で構成されていた。また遊びの内容は、子どもの日常または非日常イメージが反映された遊びに分類された。そしてごっこ遊びにおいて、子どもの実態に即した保育者の関わりの必要性が示唆されていた。

キーワード：ごっこ遊び、ままごと、保育実践、幼稚園、保育園

Abstract In this study, we explored the trends in research on pretend play, focusing on those that investigated child-care practices in kindergartens and day-care centers. 18 papers were examined from five perspectives: research purpose, definition, age and number of children, classification, and caregivers. As a result, the studies of pretend play were divided into whether or not pretend play was the main purpose of the study. Although the definition of pretend play differed from study to study, it tended to include a combination of seven factors. The age range of the study subjects was roughly from 2 years old onward, and the number of people in the case studies was roughly two or more. The content of the play was categorized into games that reflected children's every day or imaginative images. In addition, it was suggested that it is necessary for caregivers to be involved with children's play in accordance with their actual conditions.

Keywords: pretend play, make-believe, childcare practice, kindergarten, nursery school

1. 問題と目的

[請川]

本研究では「ごっこ遊び」をテーマにしている。ごっこ遊びとは、「言葉を使いはじめた幼児にみられる、大人の動作などを模倣した遊び。ままごとなど

ど」¹⁾のことであり、何かを「模倣した遊び」という定義がなされている。英語では Pretend play と訳されるように、何かのふりをする、真似をする遊びと捉えて良いだろう。

ままごとは日本における代表的なごっこ遊びであ

るが、子どもたちは遊びの中で自分の役割を決め、お母さんなど役になりきって遊ぶ。ただ、そこに登場するのはヒトだけではなく猫や犬など動物の場合もある。また、女兒が好むプリンセスごっこや、男児が行うヒーローごっこなどでは、その対象は実在するものではないが、子どもたちの生活の中に表れる憧れの存在として模倣の対象とされる。ここから模倣の対象は、お姉ちゃんや赤ちゃんなどのヒト、そしてヒトだけに留まらずペットなどの動物、絵本やアニメに出てくるキャラクターなどその幅は広いということが分かる。

ごっこ遊びに見られる模倣は、目の前にないものを再現することにあり、認知的にも発達した状態でなければ行えない。例えば、お母さんの模倣をする際、記憶の中にある「お母さん」を模倣することになるので、①対象の言動を認知し記憶する能力と、②その記憶を呼び起こしその言動を再現する能力（延滞模倣）が必要となる。ヒトの場合、延滞模倣が見られるのは生後 14 か月頃からと言われ、さらに生後 18 か月からは観察した相手の行為を鏡のように真似をすることができるようになるという²⁾。

こういった模倣を軸とするごっこ遊びは、他者の行動を自分のものにするという学びの意味と、模倣を通してコミュニケーションを行うという 2 つの意味から保育実践でも大切なものと考えられている。保育所保育指針³⁾（以下、指針）では、ごっこ遊びという記載が数か所にある。例えば「1 歳以上 3 歳未満児の保育に関わるねらい及び内容」、「人間関係」の内容の一つとして、「生活や遊びの中で、年長児や保育士等の真似をしたり、ごっこ遊びを楽しんだりする」と記されており、保育実践の中にごっこ遊びが位置づけられている。領域の「言葉」にもごっこ遊びの記述があることからみても、各領域のねらいの達成に向けて、ごっこ遊びをする子どもの姿が期待されていることが分かる。

誰かの模倣をすることは心理学ではモデリングと呼ばれ、学びの一つの形態とされている。また小川⁴⁾も、誰かの姿を観察し真似ること（観察学習）が学びの基本であると述べている。学校での学びというと、教育的な意図を持った指導者が生徒に対して系統的に教授していくという教授-学習形式を想起させられるが、実生活の学びでは観察学習も重要な位置を占めている。生田⁵⁾は伝統芸能の学びを取り上げ、芸の継承者に聞き取りを行い、彼らが模倣

をすることを起点としてわざ（技術）を学んでいく過程を分析している。また正統的周辺参加論で知られるレイブとウェンガー⁶⁾は、社会活動に参加することが学びであり、そこへの参加を通して学びを深めていく様子を明らかにしている。これらの研究に見られる徒弟の世界では、師匠（ある技術を持っている者）は教えることの専門家ではないが、弟子は師匠の近くで自分にできる仕事をこなしながら、師匠の持つ技術を見て学んでいるのである。

幼児は保育所や幼稚園などの集団生活の場で多くのことを学んでいくが、学びの意図や目的が分からない状況において教授-学習形式で学ぶのは望ましくないと考える。それは学ぶための目的が分からないままに、一方的に与えられる学びになってしまうからだ。その前段階として、自分がどうしたいか、どうなりたいかという気持ちを高めることが重要であり、その気持ちを土台にした学びを中心に置くことが幼児期には求められる。遊びは自らのやりたい気持ちを唯一の動機としている活動であり、その中でもごっこ遊びは模倣を中心としている遊びであることから、我々は保育実践におけるごっこ遊びはとても重要なものであると捉えている。

上記のような理由から、本研究では保育におけるごっこ遊びをテーマにしている。では、どのようにしてごっこ遊び研究を検索したのか。それについては次節で説明を行う。

2. 方法 [松原]

(1) 検索語句

情報検索サービス CiNii を用いて分析対象とする論文の精査を行った。まず、「ごっこ」「遊び」「子ども」等の関連語を組み合わせて論文検索を行った（検索日：2021 年 5 月 8 日）。各検索結果は表 1 の通りである。検索語句「ごっこ」は、それ単独での検索の場合、たとえば「いたちごっこ」という表現のように、ごっこ遊びのごっことは別の意味で用いられるものも拾ってしまう。そのため今回は、語句「ごっこ」での検索結果は採用せず、語句「ごっこ遊び」を検索語句に設定した。

また、「保育」「幼児」等の関連語句との組み合わせによる検索数を確認したところ、ごっこ遊び単独での検索数に比べ、どの組み合わせも検索結果数とその半数以下に減っていた。そこで関連語句との組み合わせにより拾える論文数が大幅に減ることを防

ぐため、今回はごっこ遊び単独での検索結果 339 件を採用した。また、ごっこ遊びの代表格と予想される「ままごと」を、それ単独で検索した結果 120 件が該当した。

表 1 検索語句一覧と検索結果

検索語句	検索結果 (件)
ごっこ	1107
ごっこ 遊び	468
ごっこ遊び	339
ごっこ遊び 保育	120
ごっこ遊び 幼児	140
ごっこ遊び 園	94
ごっこ遊び 子ども	70
ままごと	120

(2) 分析対象の選定

「ごっこ遊び」339 件と「ままごと」120 件において重複する結果や、論文情報が全く同じでありながらわずかな表記違いにより複数件存在するもの等を除外した結果、429 本に集約された。次に、その中から本研究テーマに合致しないもの、具体的には学術論文誌以外の雑誌記事や、研究対象が小学校児童以上であるもの、調査場が幼稚園または保育園等の幼児教育施設ではないもの等を研究対象から除外した。なお、鬼ごっこ研究は、その遊びの性質や構造からごっこ遊びとゲームの中間的位置付けとみなす小川⁷⁾の考えに依拠し、本研究では分析対象外とする。最後に、第三者による学外審査を経たもの、つまり主には各学会誌に掲載された査読付き論文のみを抽出した。

(3) 調査及び執筆分担

本研究は、分析対象論文の収集を研究メンバー全員で行った。また、執筆分担は各項の右側に〔執筆者名字〕として示す。

3. 結果

論文検索と分析対象選定の結果、本研究テーマの分析対象は 18 本に絞られた (表 2)。以下、分析対象論文を、その研究目的、ごっこ遊びの定義、分析事例に登場する年齢と構成人数、遊びの分類、そして保育者の存在という 5 つの観点から考察する。なお、分析対象である 18 本の本文内表記は、表 2 の論文番号を基に「論文」+ 数字で示す。

(1) 研究目的

[織壁]

本項では、各論文の研究目的に着目しながら、ごっこ遊びがどのような目的で取り扱われているのか、その取り扱い方を探る。

まず、18 本の分析対象論文を集約し、その結果タイプを A、B の 2 つに分類した。分類の基準は、〔タイプ A〕ごっこ遊びでなければ研究の主目的を解き明かすことができないと読み解ける、〔タイプ B〕仮にごっこ遊びでなくとも他の遊び場面に置き換えることで主目的を解き明かすことができると読み解ける、とした。

上記の方法により、〔タイプ A〕の論文は 7 本、〔タイプ B〕の論文は 11 本に分けられた。以下の通りである。

〔タイプ A〕論文①・⑤・⑥・⑦・⑩・⑮・⑯

〔タイプ B〕論文②・③・④・⑧・⑨・⑪・⑫

⑬・⑭・⑰・⑱

集約した結果、タイプ毎に傾向が見られた。〔タイプ A〕の論文は、主にごっこ遊びの構成や要素など根本的な部分に注視して分析する傾向が見られた。また〔タイプ B〕の論文は、ごっこ遊びの性質や特徴を捉えて活用し、研究の主目的を分析する傾向が見られた。

次にタイプ別により詳しく見てみると、〔タイプ A〕の中でも、特にごっこ遊びの構成に注視して分析した論文は、論文①・⑤・⑦・⑯に当たる。論文①は現実と想像の間に見られる子どもの心理状態の発達を分析、論文⑤は虚構世界と表現された世界の子どもの心理状態の内実とその関連を分析、論文⑦はごっこ遊びの出現からみる現実世界とごっこ状態の心理の揺れ動きについての分析、論文⑯はごっこ遊びの意味空間が構成される過程と構成要素の相互関連の分析である。また〔タイプ A〕の中でも、ごっこ遊びの要素に注視して分析した論文は、論文⑥・⑩・⑮に当たる。論文⑥は現実とは異なる世界においての身体による他者と同じ動きをする現象の分析、論文⑩は役の発生と成立のスタイルによる遊びの流れの分析、論文⑮は相互模倣が仲間同士の遊びで果たす役割についての分析である。

〔タイプ B〕では、ごっこ遊びの性質や特徴を捉えて活用し、研究の主目的を分析する傾向が見られる。主な主目的は、乳幼児の内面や仲間同士の言語使用など心身の発達に関する研究、遊びの持続性や砂遊びの特徴など保育内容に関する研究、保育者の

表2 本研究における分析対象一覧

論文番号	発表年	論文名	筆頭著者
①	1992	ごっこ遊びの矛盾に関する研究：心理状態主義へのアプローチ	加用 文男
②	1993	幼児のプラン共有に保育者はどのようにかかわっているか	高濱 裕子
③	1996	『ごっこ』遊びに現れた家族・家庭生活：保育所児と養護施設児の観察から	岡野 雅子
④	1998	幼児教育における質的研究の方法論的一試案—幼児のごっこ遊びの事例分析を通して	小山 優子
⑤	1999	ごっこ遊びにおける「連結発言」の意味：「心理状態主義」の展開に向けて	河崎 道夫
⑥	2000	ごっこ遊びにおける身体とイメージイメージの共有として他者と同じ動きをすること	砂上 史子
⑦	2001	2歳児のごっこ遊びにおける行為の変動と「立場」	河崎 道夫
⑧	2001	3歳児の仲間同士の会話特徴について：言語使用と発話機能の分析からの検討	小坂 美鶴
⑨	2001	幼児の仲間への働きかけと遊び場面との関連	松井 愛奈
⑩	2002	遊び開始時の「役」発生・成立スタイルの検討—4歳児のごっこ遊びをとおして	増田 時枝
⑪	2004	どう教える？「木は生きている」：一子どもの内面形成に関心を寄せ続ける保育者の姿—	立浪 澄子
⑫	2006	幼児同士の砂遊びの特徴：一ガーヴェイのごっこ遊び理論を手がかりとして—	箕輪 潤子
⑬	2008	前図式期から図式期における幼児の形態概念模索の過程：遊びの中の描画活動に注目して	栗山 誠
⑭	2009	幼児のごっこ遊びにみられる音楽的表現の特徴：話し言葉に着目して	矢部 朋子
⑮	2010	2～3歳児は仲間同士の遊びでいかに共有テーマを生みだすか：一相互模倣とその変化に着目した縦断的観察—	瀬野 由衣
⑯	2013	子どものごっこ遊びにおける意味の生成と遊び空間の構成	長橋 聡
⑰	2019	幼児の社会情動的スキルを育む「ごっこ遊び」の造形表現活動についての一考察：—3歳児の「魚釣りに行こう」での活動分析を通して—	橋本 忠和
⑱	2020	幼稚園の協同的な遊びや活動における保育者の言語的援助：4・5歳児クラスのごっこ遊びと生活発表会に向けた活動における発話の分析	奥谷 佳子

言語的援助や保育者のかかわりの影響など保育者の援助に関する研究などが挙げられる。しかし、保育実践において遊び場面や子どもが活動する場面は無数にあるにもかかわらず、各研究者はなぜ研究の主目的的分析場所として数ある中からごっこ遊びを選び出したのだろうか。各論文内のごっこ遊びを取り上げた理由などの記述から探ることが出来る。具体的には、論文②・⑧・⑰・⑱には共通点が見られ、友達や仲間などの他者とイメージや場面を共有するなどの要素を含んでいることが読み取れることから、社会性や協同性などを事由に挙げている。また、論文⑪・⑬・⑭は思考や感情、イメージなど子どもの内面が表現されるなどの要素を含むことを事由に挙げていることが読み取れる。〔タイプB〕の主目的には、社会性や協同性、子どもの内面といった共通点が見られた。これはごっこ遊びの性質や特徴を示すものとして各研究者に多く認識されていると言えるかもしれない。

ごっこ遊び研究の中で、その取り扱い方を探ることで、共通の傾向を見出すことが出来た。〔タイプA〕に見られたように、ごっこ遊びではなくてはならない研究は、裏を返せばごっこ遊びの本質に迫ることとなり、ごっこ遊びとは一体何であるのかを暗

示している。また〔タイプB〕にあったような、数ある子どもの実態からごっこ遊び場面を活用することは、ごっこ遊びが一体何であるのかを正確に捉え、明示した上で主目的を解き明かすこととなる。各研究者の取り扱い方を集約し、多角的な視点から傾向を導き出すことで、ごっこ遊びとは一体何であるのかという本質を追求する一助となった。

(2) 定義 〔森末〕

定義とは「概念の内容を明確に限定すること」²⁶⁾である。本研究では、「ごっこ遊びとは・・・である」などの明確な記述に加え、論文の記述が「他の遊びと区別してごっこ遊びの内容を限定していると解されるもの」もごっこ遊びの定義と捉えた。

その結果、定義ありと見なすものは14本であり、その定義の方法は、他の論文における定義の採用と著者によるものの2種類が認められた。また、それぞれの定義に含まれる要素は、1) 複数の仲間の存在、2) 役割の存在、3) 虚構・想像の世界、4) 仲間と共有するイメージやテーマをもつもの、5) 会話などのコミュニケーションを生み出すもの、6) 模倣によるもの、7) 物(モノ)の意味化があり、これらが複数用いられるものもあった(表3)。

表3 ごっこ遊びの定義に含まれる要素

		要素						
		1) 複数の 仲間の 存在	2) 役割の 存在	3) 虚構・ 想像の 世界	4) 仲間と 共有す るイメ ージ・ テーマ をもつ もの	5) 会話な どのコ ミュニ ケー ション を生み 出すも の	6) 模倣に よるも の	7) 物(モノ) の意味 化
論 文 番 号	①			●				
	③						●	
	⑥			●				
	⑧	●	●	●	●	●		
	⑨	●	●					
	⑩	●	●		●	●		●
	⑪		▲	▲				
	⑫	●	●	●	●			●
	⑬				●			
	⑭	●	●		●	●		
⑮	●			●	●			
⑯	●		●	●			●	
⑰	●	●	●			●		
⑱	●	●		●	●			

●：定義に含まれる要素があるもの
▲：論文内に肯定・否定の双方の見解があるもの

まず、要素1)・要素2)を含むものは、論文⑨の「仲間への働きかけと、進行中の遊びの枠組みや演じている役と関連を見出すことができる」や、論文⑬の、高橋²⁷⁾の引用による「複数の子どもが参加して、各々が役割を分担し、役割にふさわしい『ふり』の行為を演じつつ、一定のテーマを織り成していく遊び」が該当する。そして、論文⑩においても、ガーヴェイ²⁸⁾の「『役割・プラン・もの・状況設定』からなるごっこ遊び」の引用により、要素2)を明確に示している。

また、要素3)を含むものは、論文①の「ウソッコ」・「虚構」や、論文⑥の「子どもが自分とは違う誰かとして、ここではないどこかに自分がいるとして、『今・ここ』の現実とは異なる想像の世界を生きること」、論文⑧の「虚構場面の創造」が該当する。

そして、要素4)を含むものは、論文⑬において単独でみられるほか、多数あり、特に、論文⑭では、「参加者が同じイメージ、あるいは類似のイメージを持つことが前提条件であり、役割分担(組織化)

やコミュニケーションが必要となる遊びである。」とし、ごっこ遊びについて、明確に定義している。

さらに、要素5)を含むものは、論文⑧・⑩・⑭・⑮・⑱であり、遊びを成立させるために必要な要素として捉えている。特に、論文⑧では、遊びのなかでの言語の役割を強調している。

要素6)を含むものは、論文⑰で、中沢²⁹⁾や八木³⁰⁾の考えが用いられているほか、論文③の「家族や家族生活についての子どもによる延滞模倣の一つ」も該当する。

このほか、要素7)を含むものは、論文⑩・⑫・⑯であり、例えば、論文⑫では、子ども同士のやりとりにガーヴェイ³¹⁾の概念である「『プラン』、『役割』、『物(の見立て)』、『状況設定』」に該当する内容が含まれるものとされ、「『物の見立て』はプランや役割に沿って、目の前の物を別の物として扱うこと」と述べられている。また、論文⑯では、ヴィゴツキー³²⁾の「子どもはモノや行為から切り離された意味を操作しているのに、なんらかの現実的行為・なんらかの現実的なモノから分離されずに意味を操作する」が引用されている。

特殊な例として、論文⑪では、ごっこ遊びの定義に関して保育に関する実務家間に複数の異なる見解があり、その結果、保育者のとるべき行動の判断に相違をもたらす「指導論の齟齬」が生じたことが報告されている。

次に、ごっこ遊びについて、特に明確な定義の記述が見られない論文について考察する。これらの論文では、ごっこ遊びについての説明が要素の言及に留まっており、次のように記述されている。

論文④では、「状況により遊びが変化してゆく」、「遊びの成員の違い、また、誰がどの役割をするかにより、作り出されるごっこ世界が異なる」とされ、要素1)、要素2)を前提としていると考えられる一方で、「遊びの枠組み自体を容易に見出したり区別したりできる状態ばかりではない」とあり、ごっこ遊びの明示を避けている。また、論文⑦でも、「構成要素としてのふり行為が散在するとしても、『枠組み』としては不明瞭」とされており、枠組みが不明瞭と考えるが故に、ごっこ遊びについて明確に定義するには至らなかったと考えられる。

このほか、論文⑤では、論文①・⑥・⑧の要素3)虚構・想像の世界という捉え方に対し、「『空想の世界』、『想像の世界』」に浸っている状態にあるのでは

なく、あくまで眼前の現実の世界にとどまっている部分をもっている」と捉えている。

さらに、論文②では、ヴィゴツキー³³⁾を引用し、「決して個人的な活動ではなく、それらは大人の活動に強く影響されながら進行し、発達するもの」と述べている。以上 4 本は、ごっこ遊びにみられる要素を幅広く網羅的に記述しているのではなく、それぞれの論文が焦点を当てる側面についての要素のみに留まっているケースがほとんどであった。

このように、ごっこ遊びの捉え方には、幅があり、意味する範囲に違いがあることが示された。しかし、ごっこ遊びは、虚構世界において、複数の仲間との関わりの中でイメージを共有し、役割分担を行うものという認識は、ほぼ共通しており、これがごっこ遊びの定義の核となる部分と考えられる。

(3) 対象年齢と構成人数 [大滝]

本項では、18 本の該当論文において、ごっこ遊びとして取り上げられていた事例について、1) では、子どもの年齢(表 4)、2) では、人数構成に着目し(表 5)、傾向を示しながら、考察していく。特に、2) の構成人数においては、1 人で行うごっこ遊びも事例として取り上げているのかにも着目しながら、考察していく。

1) 年齢について

表 4 ごっこ遊び事例の年齢

論文番号	年齢	論文番号	年齢
①	1~6 歳	⑩	4 歳
②	4~5 歳	⑪	4 歳
③	3~5 歳	⑫	3 歳~6 歳
④	3 歳~4 歳	⑬	3 歳~6 歳
⑤	2 歳~4 歳	⑭	4 歳
⑥	4 歳	⑮	2 歳
⑦	2 歳~3 歳	⑯	4~5 歳
⑧	3 歳	⑰	3 歳
⑨	3 歳~5 歳	⑱	4~5 歳

年齢においては、幼稚園、保育園をフィールドに設定している研究が多いため、2 歳~6 歳を対象年齢としている事例が多い。なぜその年齢の子どもの事例を取り上げているかの理由は、明確に示されていない論文が多いが、中には、論文⑧にある「ごっこ遊びが可能となるのは、認知・言語・社会性の統合がなされる 3 歳から」というように、年齢について言及している論文もあり、他の論文においても、

そのような前提で行われているのかもしれない。なお、多くの研究では、ごっこ遊びとふり遊び、見立て遊びを区別しており、ふり遊びが可能になってから、ごっこ遊びに移行していくという考えの元に考察されていた。しかし、論文①では、「ごっこに対する没頭状態」「ごっこにおいてその状態にある子ども」という言葉を用いながら、ごっこ遊びを行う子どもの心理状態に着目しており、その状態にあると思われる 1 歳児の事例も一部抽出されていたが、取り上げられている事例の多くは、2 歳以上の子どもがごっこ遊びを行うものであった。

2) 人数について

表 5 ごっこ遊び事例の構成人数

論文番号	年齢	論文番号	年齢
①	表記なし	⑩	3~5 人
②	2 人~	⑪	2 人
③	表記なし	⑫	2~6 人
④	3~6 人	⑬	1 人~
⑤	2~3 人	⑭	2 人~
⑥	2 人~	⑮	2~4 人
⑦	2 人~	⑯	2~5 人
⑧	2 人~	⑰	19 人
⑨	4~8 人	⑱	2 人~

多くの研究で、2 人以上の複数人で構成されているごっこ遊びが事例として取り上げられており、構成人数についての表記はしていないものや、複数人の事例を抽出していることを前提に執筆されている論文も多く見られた。1 人のごっこ遊び事例が取り上げられていた研究は、論文⑬のみであり、論文⑬での着目点は、描画活動であることがその理由であるとも考えられる。

このように、事例として取り上げられているごっこ遊びは複数人で構成されているものがほとんどであった。研究テーマが子ども同士、または、子どもと保育者のやりとりに着目しているものが多いことがその要因として考えられる。しかし、「1 人ごっこ遊び”を行う子どもがどのように周りの環境から影響を受け、その遊びに至ったのか、その子どもの内的世界を読み取ることは困難なため、着目されることが少ないことも予想できる。それらの要因に加えて、子どもの遊びを観察したり、事例として取り上げたりする際に、友達と遊んでいる子ども、複数人で構成されている遊びばかりに着目している傾向があることも考えられるのではないだろうか。先に

も述べたように、加用³⁴⁾は、論文①において、ごっこ遊びに熱中し、現実と想像の分化が曖昧になる子どもの心理状態について「ごっこに対する没頭状態」という言葉を用いて言及している。また、「ごっこに対する没頭状態」と同じく、場面に対する没入状態の例として「夢」をあげ、「夢とごっこは同一視できないとしても、没入状態の多様性という点では共通点があるだろう」と述べている。

子どもの心理状態に着目した時に、“1人ごっこ遊び”においても、「ごっこに対する没頭状態」は起こり得ることなのではないだろうか。遊びに夢中になる子どもの内面に目をむけた際に、ごっこ遊びの人数を複数名と断定することは検討されるべきではないかと考える。

(4) ごっこ遊びの分類 [富田]

本研究の分析対象論文 18 本に登場する遊びの事例の中から、論文内で具体的なごっこ遊び名が表記されているものを抽出した。その結果、18 本中、16 本で 39 事例に具体的なごっこ遊び名の表記があったが、論文⑦・⑰の 2 本はごっこ遊びとしての表記が確認できなかった。本項ではその 39 事例のごっこ遊びを分析対象とする。また小川³⁵⁾は「ごっこは大きく 2 つに分類されると考えている。1 つは、ままごととかお店やさんのように日常生活現実を模したごっこ、戦いごっことか乗り物ごっこのように非日常のごっこ、あるいは動的なごっこである。厳密に言えば、ままごとのような日常性のごっこ、戦いごっこに代表される非日常性のごっこに大別され、その中間に乗り物ごっこといったものがあるのかもしれない」と、ごっこ遊びの分類について述べている。だが、乗り物ごっこは日常生活現実を模したごっこに分類されるのではないか、という疑問が生じる。そこで本研究では、ブロンフェンブレンナー³⁶⁾の生態学的システム理論におけるマイクロシステム、メゾシステムでの行動場面に起因するごっこ遊びを日常のごっこに、エクソシステム及びマクロシステムの影響によるごっこ遊びを非日常のごっこに分類することとした。抽出した 39 事例のごっこ遊びを、日常か非日常的か、場所、使われたツールに着目し考察する。場所

の表記がないものはツールから推測し括弧付きで記した(表 6)。

このように抽出した 39 事例のごっこ遊びの分類において、日常のごっこ遊びが 24 事例、非日常のごっこ遊びは 15 事例であった。論文⑭ザリガニごっこはザリガニを捕まえた経験(マイクロシステム)から発生したとの記述があることから日常のごっこに分類したが、論文⑱テントごっこは子どもの体験の有無が確認できずどちらも可能性ありと判断した。

ままごと、お母さんごっこ、赤ちゃんごっこ、バブちゃんごっこ、おうちごっこは 9 事例中 3 事例がままごとコーナーで見られ、2 事例(論文⑤)は滑り台、ジャングルジムで見られた。セーラームーンごっこなどの非日常のごっこはままごとコーナー(論文④・⑩)で見られ、非日常的な姿で日常のごっこ遊びのままごとが行なわれており、2 種類のごっこが統合された遊びとも言える。

砂、土、水を使った遊び(6 事例)は 4 事例(論文①・⑤・⑨・⑫)でお店やさんごっこが行なわれ、それらの形状、色の変化が活かされ商品に見立てられている。ブロック、大型積み木を使用した 8 事例はままごと(論文③・⑭)、お店(論文⑤)、基地(論文②)、宇宙船(論文⑥)、ザリガニ(論文⑭)、病院(論文⑱)、テント(論文⑱)と多彩であった。積み木からイメージした場所作りが遊びにつながっている。

テレビの変身ヒーローをモデルにしたごっこ遊びは、論文⑩に登場しているように、セーラームーンの流行により女の子も参入する遊びにもなった。しかし、論文⑪では「ヒーローごっこはテレビゲームのようにボタンひとつで生かしたり死なせたりできるゲーム感覚の遊びであって、役になりきって遊ぶところのいわゆる『ごっこ』ではない」と記述されている。ヒーローごっこ遊びは保育者間で話題にあがっているように、ごっこなのか、ごっこではないのか、という判断が分かれるところである。ヒーローごっこを保育現場、研究者ともどもごっこ遊びとするのか改めて議論される余地があると考えられる。

表6 ごっこ遊びの分類

論文番号	ごっこ遊び名	日常的/非日常的	場所 (推測される場所)	ツール
①	飛行機ごっこ	日常的	表記なし (園庭)	ジャングルジム
	電車ごっこ	日常的	表記なし (園庭)	滑り台
	ままごと	日常的	クラスの部屋	テーブル, 食器玩具
	隊長ごっこ	非日常的	表記なし (園庭)	3 輪車
	戦いごっこ	非日常的	表記なし	表記なし
	お店やさんごっこ	日常的	表記なし (砂場)	砂
②	基地ごっこ	非日常的	表記なし (室内)	積み木
	おうちごっこ	日常的	表記なし	表記なし
③	お母さんごっこ	日常的	ままごとコーナー	玩具, 布団, 大型ブロック, 車
	怪獣ごっこ	非日常的	表記なし	表記なし
	基地ごっこ	非日常的	表記なし	表記なし
	牢屋ごっこ	非日常的	表記なし	表記なし
④	お母さんごっこ	日常的	室外ままごと小屋	ほうき, バケツ, 砂
	パプちゃんごっこ	日常的	保育室	段ボール箱
	セーラームーンごっこ	非日常的	ままごとコーナー	表記なし
⑤	おにぎりやさんごっこ	日常的	園庭	砂, ブロック
	お母さんごっこ	日常的	運動場	具, 土, タオルぬいぐるみ
	ごちそうごっこ	日常的	表記なし (室内)	畳, テーブル, 食器
	オオカミと七匹の子ヤギごっこ	非日常的	保育室	丸いす, テーブル,
	電車ごっこ	日常的	保育室	観察者
	ままごと	日常的	園庭	滑り台, 皿
⑥	宇宙船ごっこ	非日常的	遊戯室	積み木
	ポケモンごっこ	非日常的	園庭	表記なし
⑧	アイスクリームやさんごっこ	日常的	保育室	食器, 食べ物のレプリカ
⑨	お店やさんごっこ	日常的	砂場	砂, 水, 草花
⑩	お姫様ごっこ	非日常的	ままごとコーナー	スカート, ベール
	セーラームーンごっこ	非日常的	ままごとコーナー	表記なし
	赤ちゃんごっこ	日常的	ままごとコーナー	乳母車, 人形
⑪	ヒーローごっこ	非日常的	園庭	ドウダンツツジ
⑫	スープ屋さん	日常的	砂場	砂, 水
⑬	お風呂やさんごっこ	日常的	保育室	画用紙, ペン
⑭	ままごと	日常的	教室	積み木, ままごと玩具
	ザリガニごっこ	日常的	表記なし (室内)	積み木, 紙
	トナカイごっこ	非日常的	教室	お面, リボン
⑮	お店やさんごっこ	日常的	ままごとコーナー	ままごとセット
	電車ごっこ	日常的	室内	空ケース
⑯	病院ごっこ	日常的	表記なし (室内)	大型積み木, 白衣, 医療玩具
⑰	海賊船ごっこ	非日常的	表記なし (室内)	表記なし
	テントごっこ	日常的・非日常的	表記なし (室内)	大型積み木段ボール

(5) 保育者の存在

[深沢]

ここでは分析対象の論文18本において, “保育者 (もしくは保母・教師)” の存在がどのように捉えられ, 分析されているかについて考えていきたい。そもそも保育者について言及されていない, 全く触れていない論文は1つもなかった。一方で, 研究の中でどのように保育者を捉えているかについては論

文によって違いがあった。今回は大きく以下の3つに分類する。

I. 保育者について触れられてはいるものの, 研究結果に直接関与していない。

II. 保育者のかかわりについて「考察」や「結果」の中で触れられているものの, ごっこ遊びに対する保育者の援助という視点では言及されていない。

Ⅲ. 保育者の姿が研究対象に含まれ、ごっこ遊びにかかわる保育者の姿が分析・考察されている。

Iに分類できる該当論文は9本であった。保育者に関して論文内において何らかの形で触れられているが、その保育者の姿が「考察」や「結果」に影響を与えていないものをIとした。さらに該当論文を細分化すると、“保育を観察する上で、保育内容や子どもに関する理解を深めるための補完として保育者に聞き取りを行っている”ものが3本(論文⑥・⑨・⑭)、“事例の中で保育者の姿は登場するものの、その後の「考察」や「結果」の中で言及されていない”ものが5本(論文①・③・④・⑤・⑦)、“保育における保育者の存在の重要性や、保育者にとっての本研究の必要性については述べられているものの、観察の対象とはしていない”ものが1本(論文⑫)と分類することが出来る。いずれの論文も、研究者の視点は保育者とは別の部分にあり、保育者の存在が論文の主軸に置かれてはいない。

Ⅱについては、4本(論文⑩・⑪・⑬・⑰)が該当する。いずれの論文も、研究の対象として保育者を分析しその結果から考察を述べているという点で、Iに分類した論文とは異なる。しかし、ごっこ遊びにかかわる保育者の姿には触れられていないことから、今回は分類Ⅲとは区別して考えていく。

Ⅲに該当する論文は5本(論文②・⑧・⑮・⑯・⑱)であった。いずれの論文もごっこ遊びにかかわる保育者の姿が分析・考察されている。論文⑮では、2歳児の子どもたちが仲間だけで遊びを成立させることの限界と同時に、保育者の足場かけが子どもたちの遊びを支えていると指摘している。また、「担任が近くで見守ってくれ、共に遊びを生み出し、時に助けてくれるという安心感があるからこそ、仲間同士の遊びに没頭できる」とも述べられている。論文⑯では、保育者の援助によって“病院ごっこ”の空間が細分化、遊びが構造化していく過程を示している。「総合考察」の中では、「能動的な意味生成としての遊びを下支えするものとして、保育者の関わりがある」とも指摘されている。論文⑮・⑯では、子ども同士の関わりを中心としたごっこ遊びの中でも、その遊びを支え、子ども同士をつなぐ役割として保育者の重要性を指摘している点が共通している。

また、論文⑧・⑱は言語でのやりとりに着目している点で共通している。論文⑧は、3歳児のごっこ

遊びにおける“子ども同士”と“子どもと保育者”のやりとりを比較し、「3歳児に対して会話展開の調整や社会的慣習の模範を示すおとなの役割の重要性が示唆された」と結論付けている。また、論文⑱では、ごっこ遊び場面と生活発表場面を比較し、場面や学年による保育者の発話の特徴を検討した結果、1.学年に共通して協同的な遊びや活動では保育者の質問の発話が最も多かったこと2.遊びでは活動に比べ幼児の主体性はより尊重され、学年ごとに異なる発話特徴が見られたこと3.活動では遊びに比べ保育者の発話は増加し、指示の発話が多く指示の質が学年で異なっていたこと、という違いが見られたと述べている。

一方論文②では、言語以外の行為・表情も含めて行動描写法を用いた分析を行っている。分析の結果、保育者は幼児の遊びの質的变化に対応させて、段階的にフォーマットを変容させていることが明らかになり、そのフォーマットは5段階あるとした。

以上のように、対象論文を保育者という視点で考えると、研究の目的や手法によってその捉え方が様々であることが分かる。本研究では、保育実践を対象とした論文を選出し分析を行っているため、たとえ論文内の観察対象に保育者が含まれていないとしても、保育者が構成した環境の中で、共に生活する子どもの姿が観察・分析されている。特に、ごっこ遊びに関わる保育者の姿を分析対象とした研究では、保育者の介入によって、子どもの発話・遊びの方向性が変化していくことが示されており、子どもの実態に合わせた保育者の関わりの必要性も示唆されている。保育実践のごっこ遊び研究においては、保育者の存在が非常に重要であることの表れではないだろうか。

4. 総合考察

[松原]

本研究は、保育現場(幼稚園、保育園、こども園)を調査対象に据えた国内のごっこ遊び研究を概観し、それらにおける研究内容の傾向を探ったものである。その結果、保育現場におけるごっこ遊び場面をとりあげた研究には、ごっこ遊びを研究の主目的とするものと、研究目的は他にあり、ごっこ遊びをツールとして目的に迫ろうとするもの、という大きく2つの傾向が確認された。

また、ごっこ遊びという語句に対する定義づけについては、分析対象論文全てが明確な定義を行って

はおらず、ごっこ遊びの部分的特徴の言及にとどまるものもあった。定義ありとみなすものにも各研究者の解釈による違いが多分にみられたが、主に7つの要素が複合的に組み合わせられている傾向が見られた。ただし、分析対象論文はどれも実践現場からのデータ収集であるにも関わらず、その遊びをごっこ遊びとみなす具体的・客観的指標が示されているものは1本もなかった点が気にかかる。分析対象論文内には、実践現場で出会う数多の遊びからごっこ遊びを取り出して分析事例へ含めるという方法が採用されているものもある。その際に、研究者の主観的判断に偏らない事例収集が行われたことを示すためにも、ごっこ遊びが研究の主目的であるか否かに関わらず、その遊びをごっこ遊びとみなすための定義や判断指標を明示することは重視すべきである。

他に、ごっこ遊び研究における研究対象年齢と、分析対象とされるごっこ遊びの構成人数、および具体的ごっこ遊び名を集約した。その結果、対象児や対象年齢を指定していない研究の場合、対象年齢の下限は2~3歳であった。これは、認知機能発達との関連や、見立て遊び等を経てごっこ遊びが発生する年齢として2歳以降を目安としていることが予測されたが、おおよその研究で年齢設定に対する明確な説明はなされていなかった。なお、上限は6歳であるが、これは本研究の研究対象が保育現場を対象としたものに限定していることから生じる結果である。また、ごっこ遊びの構成人数は、おおよそ全ての事例が2名以上であった。本研究では、1名によるごっこ遊びという状況の成立可否を読み解くこともねらいであったが、先行研究の傾向からいえば1名での遊びはごっこ遊びと認定されないとも考えられる。しかし、ごっこ遊びに対する定義づけの希薄さと関連付けるならば、分析対象論文に関しては2名以上という条件にさほどの意図はないように思える。むしろ、研究者側に潜むごっこ遊びを複数名と捉える主観的前提や、研究目的に沿い複数名の事例が採用された結果が反映されていると思われる。

また、ごっこ遊びの分類で集約した結果、その遊びの背景を基に日常的テーマと非日常的テーマに大別することができた。ただし、事例の中には双方のテーマが入り混じった設定で展開されるものも見受けられることから、ごっこ遊びを見取る場合には、それを見取り支える大人側の柔軟な視点、姿勢も重要となってくるだろう。

なお、保育実践場面を対象にごっこ遊びを検討しようとした八木ら³⁷⁾は、ごっこ遊びの分類を試みている。ここでは「TVのキャラクターごっこのような遊びは除き」としており、八木らははなからテレビ由来のごっこ遊びを事例に選んでいない。しかし、分析対象論文の筆頭著者である学術研究者らの手によれば、戦隊物も魔法少女物も、それらはごっこ遊びとみなされ分析対象となっている。論文⑩からは、保育実践者同士の討論におけるヒーローごっこの位置づけに関する対立が読み取れるが、これは保育者・研究者間にも生じうる対立、葛藤ではないだろうか。本研究で鬼ごっこをごっこ遊びと区別することを明示化したように、ヒーローごっこにおいても研究者側がその位置づけ、取り扱いを吟味していかなければならない。

最後に、保育者の存在をごっこ遊び研究の考察対象としているものに着目した場合、彼らの存在はごっこ遊びの下支え、足場かけの役割であり、その存在自体が子どもへ安心感を与えていることが示されていた。また、保育者の遊びへの関わりは、子どもの発話や遊びの方向性の変化と関連付けられており、保育者の存在やその行為における重要性が示唆された。

以上、保育実践現場を調査対象としたごっこ遊び研究を概観した。実験室や、調査用に作られたごっこ遊びコーナーではなく、実際に子どもたちが日常場面で興じるごっこ遊びを研究対象とすることは、ごっこ遊びがもつ設定の複雑性や展開の目まぐるしさなど、子どもたちにより生起するごっこ遊びの性質をより多く獲得することに繋がるだろう。ただし、それには研究者側がまずはごっこ遊びとは何であるのか、眼前で繰り広げられるその遊びを、ごっこ遊びと認識する根拠は何であるのか、という意識を明確にしておく必要があるだろう。複数名で、ある物を他の物に見立てて、言語のやり取りが行われていれば、それはどれもがごっこ遊びであると言えるのだろうか。はたまた一人で、黙々と物を扱っているだけであれば、それはごっこ遊びとはみなされないのだろうか。保育実践現場を対象にごっこ遊びを調査する際には、研究者のもつ主観的前提や曖昧な判断材料が確固とした自覚なく調査結果へ反映されかねないということを、研究者一人ひとりが留意する必要があるだろう。

5. 本研究の課題

本研究は、保育実践におけるごっこ遊びを対象とした先行研究の傾向を概観した。今回は査読付論文に限定したこともあり、年代による内容変遷、動向を追うことは避けており、数量比較による分析も適当ではないとし行っていない。以上については分析対象を広げて考察する必要がある。

6. 引用文献

- 1) 小学館 (編):「ごっこ遊び」, 大辞泉第二版, 1325 (2012)
- 2) 明和 政子:まねが育むヒトの心, 岩波書店, (2012)
- 3) 厚生労働省 (編):保育所保育指針, 厚生労働省, 27 (2017)
- 4) 小川 博久:21 世紀の保育原理, 同文書院, 55-58 (2005)
- 5) 生田 久美子:「わざ」から知る, 東京大学出版会, (1987)
- 6) J.レイブ, E.ウェンガー:状況に埋め込まれた学習, 産業図書, (1993)
- 7) 小川 博久 (編):「遊び」の探究—大人は子どもの遊びにどうかかわりうるか, 生活ジャーナル, 192-194 (2001)
- 8) 加用 文男:ごっこ遊びの矛盾に関する研究:心理状態主義へのアプローチ, 心理科学, 14, 1, 1-19 (1992)
- 9) 高濱 裕子:幼児のプラン共有に保育者はどのようにかかわっているか, 発達心理学研究, 4, 1, 51-59 (1993)
- 10) 岡野 雅子:『ごっこ』遊びに現れた家族・家庭生活:保育所児と養護施設児の観察から, 日本家政学会誌, 47, 5, 435-444 (1996)
- 11) 小山 優子:幼児教育における質的研究の方法論的一試案 —幼児のごっこ遊びの事例分析を通して, 保育学研究, 36, 2, 185-192 (1998)
- 12) 河崎 道夫, 山本 真由美:ごっこ遊びにおける「連結発言」の意味:「心理状態主義」の展開に向けて, 心理科学, 21, 1, 44-59 (1999)
- 13) 砂上 史子:ごっこ遊びにおける身体とイメージ —イメージの共有として他者と同じ動きをすること, 保育学研究, 38, 2, 177-184 (2000)
- 14) 河崎 道夫:2 歳児のごっこ遊びにおける行為の変動と「立場」, 心理科学, 22, 1, 18-29 (2001)
- 15) 小坂 美鶴:3 歳児の仲間同士の会話特徴について:言語使用と発話機能の分析からの検討, 聴能言語学研究, 18, 3, 154-162 (2001)
- 16) 松井 愛奈:幼児の仲間への働きかけと遊び場面との関連, 教育心理学研究, 49, 3, 285-294 (2001)
- 17) 増田 時枝, 秋田 喜代美:遊び開始時の「役」発生・成立スタイルの検討 —4 歳児のごっこ遊びをとおして, 保育学研究, 40, 1, 75-82 (2002)
- 18) 立浪 澄子:どう教える?「木は生きている」:一子どもの内面形成に関心を寄せ続ける保育者の姿—, 保育学研究, 42, 1, 51-58 (2004)
- 19) 箕輪 潤子:幼児同士の砂遊びの特徴:—ガーヴェイのごっこ遊び理論を手がかりとして—, 保育学研究, 44, 2, 178-188 (2006)
- 20) 栗山 誠:前図式期から図式期における幼児の形態概念模索の過程:遊びの中の描画活動に注目して, 美術教育学:美術科教育学会誌, 29, 0, 207-217 (2008)
- 21) 矢部 朋子:幼児のごっこ遊びにみられる音楽的表現の特徴:話し言葉に着目して, 学校音楽教育研究, 13, 0, 227-234 (2009)
- 22) 瀬野 由衣:2~3 歳児は仲間同士の遊びでいかに共有テーマを生みだすか:—相互模倣とその変化に着目した縦断的観察—, 保育学研究, 48, 2, 157-168 (2010)
- 23) 長橋 聡:子どものごっこ遊びにおける意味の生成と遊び空間の構成, 発達心理学研究, 24, 1, 88-98 (2013)
- 24) 橋本 忠和:幼児の社会情動的スキルを育む「ごっこ遊び」の造形表現活動についての一考察:—3 歳児の「魚釣りに行こう」での活動分析を通して—, 美術教育学研究, 51, 1, 265-272 (2019)
- 25) 奥谷 佳子, 砂上 史子:幼稚園の協同的な遊びや活動における保育者の言語的援助:4・5 歳児クラスのごっこ遊びと生活発表会に向けた活動における発話の分析, 保育学研究, 58, 2・3, 267-278 (2020)
- 26) 新村 出 (編):広辞苑第6版, 岩波書店, 1902 (2007)

- 27) 高橋 たまき：子どものふり遊びの世界—現実世界と想像世界の発達，ブレーン出版，4 (1993)
- 28) C.ガーヴェイ (高橋たまき訳)：「ごっこ」の構造—子どもの遊びの世界—，サイエンス社 (1980)
- 29) 中沢 和子：イメージの誕生 0 歳からの行動観察，日本放送出版社，134 (1979)
- 30) 八木 紘一郎：ごっこ遊びの探求—生活保育の創造をめざして—，新読書社，41 (1992)
- 31) 前掲 28)，6
- 32) L.S.ヴィゴツキー (神谷栄司，訳)：子どもの心理発達における遊びとその役割，ごっこ遊びの世界：虚構場面の創造と乳幼児の発達，法政出版，21-22 (1933/1989)
- 33) 前掲 32)，2-73
- 34) 前掲 8)
- 35) 小川 博久：遊び保育論，萌文書林 (2010)
- 36) U.ブロンフェンブレンナー (磯貝芳郎，福富護訳)：人間発達の生態学：発達心理学への挑戦，川島書店 (1996)
- 37) 前掲 30)